**「ごん、お前まいだったのか。いつも栗をくれたのは」**

**なんと悲しい結末でしょうか。兵十は、火縄銃でごん狐を撃ってしまった後に、いつも栗や松たけを運んでくれていたのが、ごん狐であることを悟るのです。作者は、アンハッピーエンドになるこの物語を通して、何を語ろうとしていたのでしょうか。**

**同居の義理の弟は、身体障害者一級で、ベッドに寝たきりでした。「ぼくの生きている意味を教えて下さい。」というメーセージを読んだ私は、ベッドに寝たきりでも生きがいをもって生きている障害者は、たくさんいるから、やるべきことやるべきだと言いました。ホームページを作り障害者の相談にのったり、自分の体験を病院や小学校などで語ったり、するべきだと、強く働きかけました。そして、全面的な協力を申し出たのです。ですが、私の熱意は、家族から反発されてしまい、義理の父とは険悪なムードになってしまいました。**

 **『ごん狐』は、次のように展開していきます。兵十が川でうなぎなどを捕っていると、いたずら好きのごん狐は、キスなどを川に投げてしまいます。数日後にお葬式があり、亡くなったのは、兵十の母親であることを知り、うなぎが食べたいと言いながら死んでしまったにちがいないと考えました。反省したごん狐は毎日栗や松たけを運んだのですがーー。**

**ごん狐は、お葬式のしきたりがわかったり、兵十の気持ちを察したり、するなど明らかに擬人化されています。兵十は、「ごん」と愛称で呼んでいました。ごん狐がいたずらするのも、本当は兵十などにかまってもらいたかったからではないでしょうか。二人は、仲がよかったし、より深くわかり合いたかったのだと思います。ですが、二人はわかり合えませんでした。人は、誰でも心の底では仲良くやっていきたいという気持ちをもっています。ですが、友達とけんかをしてしまったり、夫婦げんかをしてしまったり、します。国同士も仲良くやっていけば、両方の国の経済や文化が発展するなど、よいことばかりですが、戦争をして殺し合ってしまいます。**

**ごん狐のテーマの一つは、お互いのことを思いやっていながら、人はどうしてすれ違ってしまうのかということだと思います。さらに、ごん狐という物語を通して、人がわかり合えるとはどういうことなのか、考えさせています。　　　　　　　　　　　　　　　　　日本人は、本音と建て前を使い分けるとよく言います。ですが、西洋の映画を見ていても、沈黙や仕草などがしばしば大きな意味を持っていています。人間は、心の奥底にある本当の気持ちを決して誰にも言いません。親や親友であろうともです。言葉に現れるものは、心のほんの断片です。兵十もごん狐がどうしていたずらをするのか、考えることができれば、不幸な結末にならなかったはずです。暗黙の言葉に耳を傾けるべきだと、物語は強く主張しているのではないでしょうか。**